SON-DAY, SEPTMBER 24th 2023 SON-DAY WORSHIP SERVICE No.1027
単立キリスト教会 マラナサ・グレイス・フェローシップ **Maranatha Grace Fellowship【MGF】** *Since Jan. 18, 2004*
教会所在地：〒380-0802 長野市上松２丁目７－２０ ☎: 026-219-2388 牧仕：Kaz、菊地 一徳（かずなり）
https://mgfchrist.com www.facebook.com/mgf.nagano.japan jesus-mail@mgfchrist.com

MGF は、神第一主義、キリスト中心主義、聖霊主導主義の教会

礼拝黙想 Meditating on Worshi

「神にあっては失望などありません。莫大な経費がいる時も、山のような困難も、

また、万策つきて行き詰ったようでも、なお、なすべきことがあります。神に望みをおくことです。」（ジョージ・ミュラー）

A「花嫁よ。私と一緒にレバノンから、私と一緒にレバノンから来ておくれ。アマナの頂から、セニルの頂、ヘルモンの頂から、獅子の洞穴、豹の山から下りて来ておくれ。」
（雅歌４：８）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ウォルター・ウェストン

まだ宗教登山や狩猟のための登山しかなかった日本で富士山をはじめ槍ヶ岳や御嶽山、木曽駒ヶ岳をはじめとして多くの山岳を登り、広く海外に日本アルプスや文化を紹介するとともに、日本の従来の登山の概念を革新する近代登山の先駆けとなったのが英国人ウォルター・ウェストンでした。彼を記念して関係した各地ではレリーフが作られ、未だに上高地をはじめとしていろいろな所で毎年ウェストン祭が行われています。

彼は 1888(明治 22)年から 1915(大正 4)年の 27 年間(滞在年数は通算 20 年間近く)に英国国教会の宣教師として三度に渡って来日し、その間に日本アルプスを中心にいろいろな山岳を踏破し、日本のアルプスや文化をまとめた「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」(日本アルプスの登山と探検)他を英国で出版し、広く海外に日本を紹介しました。

彼は 1861 年、イギリスのダービー市で生まれ、ケンブリッジ大学クレア・カレッジで学び、1886 年に司祭となり、1888 年にリドレー・ホール神学校で英国国教会の聖職について学んだのちに日本に宣教師として来日します。

英国をはじめヨーロッパ各国では既に山岳会が作られ、名だたるスイスアルプスはすでに登り尽くされ、アルプス黄金時代から難関ルートへの開拓時代に入っていました。そんな時代にあって、彼もマッターホルンやヴッターホルンなどいろいろなスイスアルプスを登るなどしていた登山愛好家でした。

1888 年に宣教師として赴任したものの眼病治療のためと称して？一旦宣教師職を辞して登山にのめり込んでいきます。1890 年には富士山を皮切りに日光・白根山や男体山、過去赴任していた九州の祖母山、阿蘇山や霧島山、韓国岳、桜島などの山々や、飛騨山脈や赤石山脈などの山々を登っているようです。

1891 年から本格的に登山を開始し、浅間山、槍ヶ岳(悪天候などのため鞍部まで)、御嶽山、木曽駒ヶ岳を登っています。1892 年には 5 月の富士山、乗鞍岳、槍ヶ岳、赤石岳に、1993 年には恵那山、富士山、大町から針ノ木峠・ザラ峠を経て立山、前穂高岳に登っています。

前穂高岳や前年の槍ヶ岳などの登山の折には、明神池の辺に小屋を持つ猟師の上條嘉門次を案内人に登頂しています。

上條嘉門次は生涯でクマ 80 頭、カモシカ 500 頭を仕止めたとされ、ウェストンの著書の中で、抜群の案内人として紹介されたために国内外の登山者に案内人として指名されるなど人気を博します。ウェストンと 20 年間以上に渡る交流から嘉門次はウェストンからピッケルを贈られ、現在でもそのピッケルは嘉門次小屋に掲げられているということです。

1894 年には白馬岳、笠ヶ岳(実際は抜戸岳とみられる)、常念岳、御嶽山、身延山を登り、1895 年まで滞在し、離日します。

英国に帰国した翌年の 1896 年には先述した「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」を出版することになります。この本の記述からは神学者のそれではなく、ユーモアを交えたエピソードをはさみながら、民俗学的、文化人類学的、地質学的な観点に基づいて日本アルプスを紹介しており、日本の諺にも日本文化にも精通していることが伺えますが、日本語は拙かったということです。

赴任地での宣教師としての評判はあまり良いとは言えなかったようですが、再度日本への赴任が決まります。1902 年、登山愛好家のエミリー・フランシスと結婚し、新婚旅行でカナディアンロッキーに登った足で奥さんと共に再来日します。

その年には広河原から北岳を登り、1903 年に甲斐駒ヶ岳、浅間山、1904 年に金峰山、鳳凰三山、北岳、間ノ岳、仙丈岳、高妻山、妙高山、八ヶ岳に登ります。地蔵岳では弘法大師も誰も成し遂げられなかった尖峰初登坂したことで地元の漁師などから神社建立して神主になってくれと地元の人から言われたエピソードもあったようです。

妻のエミリーさんは 1903 年に富士山、1904 年には再度富士山に登り、火口底まで下りて石を持ち帰っています。また、浅間山や八ヶ岳、妙高山、戸隠山と高妻山にも登っており、戸隠・高妻山では初めて登った外国人女性ということでレリーフが設置され、毎年「ミセス・ウェストン祭」が行われているそうです。

そして、二人は 1905 年に離日します。それから 6 年後の 1911 年には三度目であり、最後になる来日滞在を果たします。その年、二人は妙義山に登っています。

1912 年には夫人を伴って有明山、燕岳を登り、槍ヶ岳の東稜、奥穂高岳は奥さんは伴わず登っています。1913 年には夫人を伴って焼岳、槍ヶ岳、霞沢岳、奥穂高岳を登っていますが、この時も 18 年ぶりに再開し既に 60 代半ばになっていた上條嘉門次が案内しています。一緒に登った妻のエミリー・ウェストンは槍ヶ岳や奥穂高の女性初登頂者となっています。また、夫人とともに白馬岳も登っています。

1914 年には単独で立山から剱岳を登り、ザラ峠と針ノ木峠を経由して下山してい

ます。

しかし、第一次世界大戦の勃発で帰国を決意した二人は最後の山行を中房温泉から大天井岳を登り上高地に下りるコースを選びます。上高地では嘉門次とも別れの挨拶を交わし、1915 年に離日して日本滞在は終わりを告げます。

英国に帰ってからは執筆活動や日本アルプスや日本文化についての講演などを行ないながら日本への思いを温めていたようですが、1940 年(78 歳)に脳出血で急逝してしまいます。

「Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps」は日本アルプスについての紹介だけでなく、日本文化に対しての深い洞察と知識、リスペクトと深い愛情が感じられる紀行本です。今では失われてしまった当時の人々の意識や暮らしぶりについても知ることができます。岡村精一の翻訳もとても読みやすいものでした。嘉門次小屋四代目の上條輝夫の妻である上條久枝著の「フォルター・ウェストンと上條嘉門次」と合わせて読んでみることをお勧めします。

以上、『獨協学園ワンダーフォーゲル部 OB 会のホームページ』より

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『KAMIKOCHI ONSENBA CLIMBERS' BOOK』は1914年、ウェストンが最後の北アルプス登山のために上高地温泉に宿泊した際、懇意にしていた温泉宿の主人・加藤惣吉氏に託した1冊のノートが始まり。ノート巻頭にウェストン自らの文字で、「上高地温泉宿に滞在する欧米人登山者に、そのルートや時間、天候などの詳細を手短に記入してもらい、後の安全な登山に利用してもらうことを願って」と記されている通り、第2次世界大戦を挟んで、上高地の温泉宿を訪れた外国人らの手で書き継がれてきた。現在アルピコグループ（長野県松本市）が所有し、上高地ルミエスタホテル内で保管するこのノートは、これまで登山家のごく一部にはその存在が知られていたが、その中身については一般にほとんど知られることがなかった。

日本アルプスの自然に魅せられ、地元に生きる人々との交流を生んだウェストン。その思いに触れ、呼び掛けに応えた欧米人登山客の目に、スポーツ、行楽を目的とした近代登山の黎明（れいめい）を迎えた当時の槍・穂高の山々はどう映っていたのか、戦後にかけてどのような人々が訪れ、足跡を残していったのか――松本市は昨年9月、「海外からの登山家により、上高地の登山史を記す大変重要な資料であり、先人たちが育ててきた登山の歴史と文化を通じ、『安全な登山』『山の恵みの豊かさ』『次世代へつないでいく山岳文化』など、クライマーズ・ブックを通じ、国内外に向け発信していくことは、岳都・松本として意義深い」と、このノートにあらためて注目。刊行会を発足し、関係機関と協力しながら、山の日の発刊を目指してプロジェクトを進めてきた。

刊行会を主導した同市山岳観光課は刊行に当たって、「ウェストンが離日してから100年余りが経過した今、このノートを残したウェストンの思いを、さらにこの先の100年に引き継ぎ、山を愛する人々の輪が国境を越えて広がっていくことを祈念する」としている。

ウェストンは、英ダービー市出身、ケンブリッジ大学を卒業、リドレー・ホール神学校で英国国教会の聖職について学び、1888年に宣教師として初来日した。宣教師であると同時に、欧州のアルプスに登る登山家でもあったウェストンは、日本でも飛騨山脈（北アルプス）や赤石山脈（南アルプス）、富士山など各地の山々に登った。上高地周辺の山でいえば、92年に槍ヶ岳（標高3180メートル）に登頂、翌年には、地元の猟師らの案内で、外国人初として前穂高岳（標高3190メートル）に登頂している。

英国帰国後の1896年に、日本での経験を『日本アルプスの登山と探検』という1冊の本にまとめて出版。「日本アルプス」という呼称は別の英国人が名付け親だが、ウェストンが初めて単行本の表題に使用したことで、日本国内外に広く知れ渡ることになった。登山に関する記録が軸になっているのはもちろんだが、日本アルプス周辺に住む日本人の習俗や信仰、迷信についても（誇張されて書かれてはいるものの）書き残されているのが興味深い。

特に、それまでの日本では、山に登るという行為は、山岳信仰に基づく巡礼か、鉱物を掘るためのものであった。ウェストンも行く先々で「苦労してまでなぜ山に登るのか」といぶかしげな表情をされたそうだが、そうした現地の人々との交流が、日本人にレジャーとしての登山への気付きを与えていったことがうかがえ、この書物は日本登山史上、最も重要な位置を占める文献、日本近代登山を推進し育て上げる大きな役割を担ってきたと高く評価されている。

宣教師らしく、日本各地で出会ったキリスト者との交流の様子も散りばめられている。富山県ではある日曜日、民家から歌声が聞こえてきたので心惹かれて尋ねると、キリスト教徒の小さなグループの本部で、外国の助けなしに日本の奥深くのここかしこにまでキリスト教が入り込んでいることに感動を覚えたこと、長野県では、親しくなった村の巡査がキリスト教徒で、近所に50人ほどのキリスト教徒がいることを教えてくれたことなどが記録され、松本にいた日本人牧師・覚前政蔵と「ささやかな意義深い礼拝」をささげたことなどが記されている。

さらに、続編の『日本アルプス再訪』では、日本と古代ギリシャが非常に似通っていると考察し、「日本民族は自由を強く愛する心、誇り高い同族意識が他の民族より明確」であると述べるなど、当時の外国人宣教師の目に日本人がどのように映っていたのかを計り知る材料となる記述を数多く残した人物でもあるといえる。

以上、『Christian Today』（2016/8/11）より抜粋 Ω

＜お知らせ **Announcement**＞

★１０月１日（日）　午後　受洗記念祝会　ポットラック・ランチでお祝いします。
★１０月８日（日）　ディアコノスのランチ提供があります。

MGF はキリスト狂徒の集まるキリスト狂会

「教会〔マラナサ・グレイス・フェローシップ（略称：MGF)〕はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです」（エペソ１：２３）。「あなたがた〔MGF〕は、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」（コロサイ２：１０）。